

13. 総合的な学習の時間「のぞみタイム」論文

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成Ⅱ

探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子どもの育成 自ら課題を見出し続けるカリキュラムの創造



| | |
|-------------------------------|-----|
| I 研究の目的 | 157 |
| 1 研究の背景 | 157 |
| 2 研究の方向 | 157 |
| II 研究内容 | 158 |
| 1 探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子どもとは | 158 |
| 2 自ら課題を見出し続けるカリキュラム創造の基本的な考え方 | 159 |
| (1) 「のぞみタイム」における枠組みについて | 159 |
| (2) 言語活動の充実 | 159 |
| (3) 体験的な活動の充実 | 159 |
| (4) 協同的な活動の充実 | 159 |
| (5) 「探究」に生かせる知識・技能の明確化 | 159 |
| (6) 伝統や文化に関する教育の充実 | 159 |
| 3 のぞみタイムのカリキュラムの全体構想 | 160 |
| (1) 全体構想についての基本的な立場 | 160 |
| (2) 「のぞみタイム」における枠組 | 160 |
| (3) 言語活動の充実について | 161 |
| (4) 体験的な活動について | 161 |
| (5) 協同的な活動について | 162 |
| (6) 「探究」に生かせる知識・技能の明確化 | 162 |
| 4 のぞみタイムのカリキュラムの具体化 | 163 |
| III 研究の実際 | 165 |
| 1 実践の立場 | 165 |
| 2 「のぞみタイム」第4学年 年間指導計画 | 165 |
| 3 実践の結果と考察 | 166 |
| IV 研究の成果と課題 | 168 |
| 1 研究の成果 | 168 |
| 2 研究の課題 | 168 |

【学校教育目標】

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成 【校訓】 まことの子・ちからの子・のぞみの子

【目指す子ども像】

(知) 互いの考えに学び合う子ども

(徳) 心と心がひびき合う子ども

(体) 心と体をきたえ合う子ども

【本校の主な教育課題】

確かな学力の面から

○論理的な思考 ○伝え合う方法の習得
○学ぶ喜びや楽しさの実感

豊かな心の面から

○人間関係(他者意識) ○自己の発揮の仕方
○多様な体験

健やかな体の面から

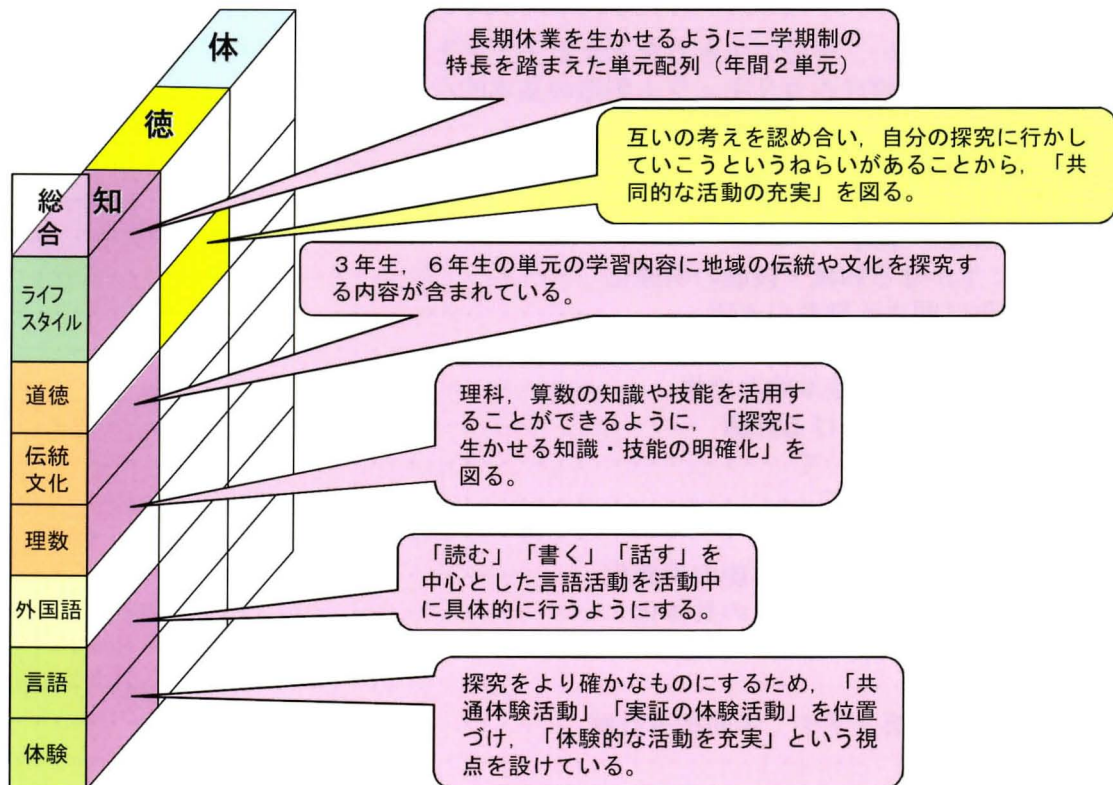
○基礎体力 ○生活習慣 ○健康・安全

【確かな学力、豊かな心、健やかな体を調和的にはぐくむカリキュラム】

| | | 確かな学力をはぐくむ観点(知) | | | | | | | | | | | | | 豊かな心をはぐくむ観点(徳) | | | 健やかな体をはぐくむ観点(体) | | |
|-------------|----|-----------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----------------|--|--|-----------------|--|--|
| | | 国語 | 社会 | 算数 | 理科 | 生活 | 音楽 | 図工 | 家庭 | 体育 | 道徳 | 外国活動 | 総合 | 特活 | 複式 | | | | | |
| カリキュラム創造の視点 | 枠組 | 学校のライフスタイルの見直し | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 内容 | 道徳教育の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 伝統や文化に関する教育の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 理数教育の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 外国語教育の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 方法 | 言語活動の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 体験活動の充実 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

本校の総合的な学習の時間「のぞみタイム」の目標

身近な自然や社会、そこにかかわる人々についての課題を自ら設定し、互いに高め合いながら、情報を集めたり、調べたことを分析したり、表現したりすることができるようにするとともに、学んだことを基に自分の生き方を考えることができる。



I 研究の目的

1 研究の背景

総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、「生きる力」はぐくむ上でもますます重要な役割を果たすものと考えられ、改訂が行われた。本校では、平成 21 年度先行実施に向け、昨年度研究において、本校

【表 1 子どもに身に付けさせたい資質・能力】

| | 資質・能力 |
|--------|-----------------------------|
| 【感じる力】 | 対象の広がり、対象に対して課題意識を持つ力 |
| 【調べる力】 | 課題に対して見通しを持つ力 様々な手段で調べる力 |
| 【考える力】 | 比較、関係付け、多面的な見方で考える力 |
| 【伝える力】 | 追究したことを基に目的に応じて伝える力 |
| 【生かす力】 | 追究したことを基に実践できる力 |

の教育課題や時代の要請等を踏まえ、目標を自校化するとともに、表 1 のように育てたい資質・能力、学習内容を明らかにすることができた。そして、1 年間の実施期間を通して実践を重ねてきた。その中で、子どもたちは、育てたい資質・能力である「感じる力」「調べる力」「考える力」「伝える力」「生かす力」を身につけてきている。しかし、初めに設定した自分なりの課題の探究だけで満足したり、自分の生き方との関連で探究できなかったりといった子どもが見られた。つまり、総合的な学習の時間の大きなねらいでもある、「自己の生き方」について深く考える子どもの姿に高まっていないという課題が見出された。

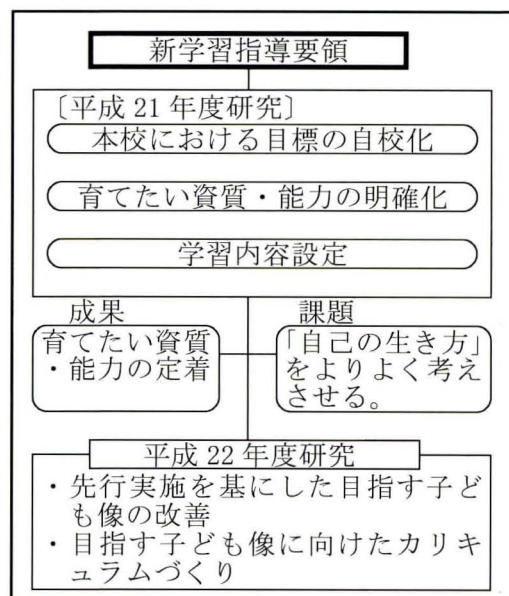
そこで、自分の探究を通して自己の生き方を見つめ、今後に生かしていこうとする子どもの様相をよりよく見出せるような学習を展開していくことが必要であると考えた。

2 研究の方向

先行実施の課題や成果を基にした本校の学校教育目標の具現化のための総合的な学習の時間「のぞみタイム」は、子ども一人一人が自らの探究についての喜びを味わい、自分の生き方を考えさせることが重要である。なぜなら、自分自身にとって必要感のある課題を自らが見出し、解決することで、よりよい自分を目指していこうとする姿が見出されるのではないかと考えるからである。そのためには、自分の探究について、自分の生活や自分自身に関わる問題等の視点から、価値を見出し、解決していく喜びを味わわせることが必要である。そうすることで、自らの学習の内容や方法を振り返りながら、より発展的な課題や新たな解決方法を見出すことにつながることを期待できる。そして、そのような探究をくり返し発展させて行くことができるようするためには、子どもが探究の喜びを味わいながら自分の生き方を考えて行くための具体的な枠組や活動内容や指導方法等を明らかにすることが大切である。つまり、自ら課題を見出し続けていくことができるようなカリキュラムを創造することが必要である。

そこで、次のように研究主題と副題を設け研究を進めていく。

探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子どもの育成
～自ら課題を見出し続けるカリキュラムの創造～



【図 1 研究の方向】

Ⅱ 研究内容

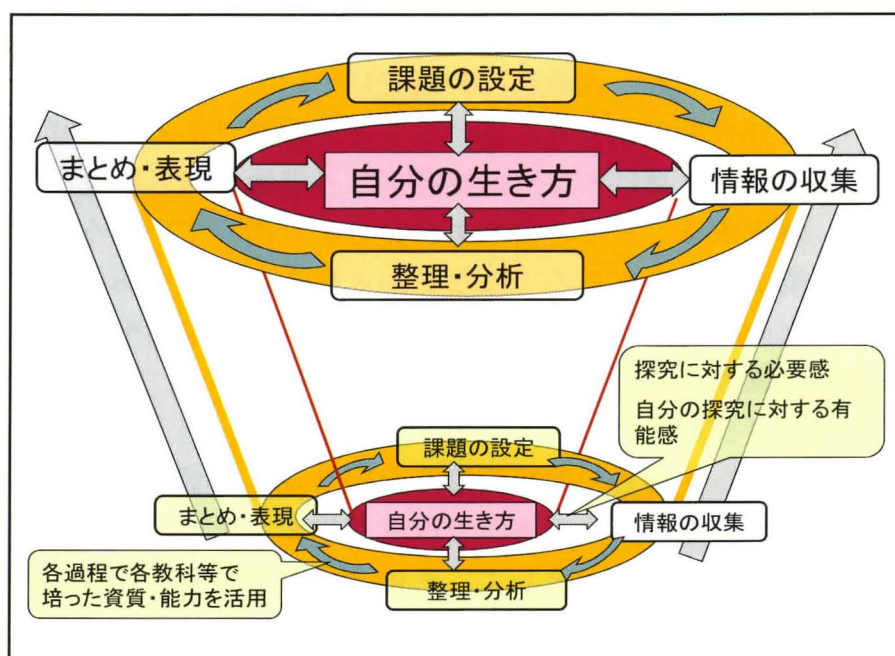
1 探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子どもとは

子どもが、探究的な活動が続けていく際には、それぞれの活動について自分が選択した活動に価値を見出し、それが有用であると感じることが大切である。そうすることで、自分の探究をさらに発展させたり、自分の生活との関連を見出し、生かしていこうとする姿が期待できるからである。

そのためには、探究の対象が知的好奇心を高めるものであると同時に自分の生活経験やこれまでの学習で得た事象と関連があり、解決の見通しがもてるものである必要がある。また、探究の過程においては、学ぶ方法がこれまでの教科等で得た知識・技能を活用できたり、新たな発見から自分自身なりの解決方法を見出すことで自分の学びに対する有能感を感じさせたりすることが大切である。

探究的な学習では、図2のように、より必要感のある課題を自らの生き方との関連で見出すことが大切である。そして、「情報の収集」や「整理・分析」、「まとめ・表現」といった各過程においても自分の生き方を見つめながら探究を続けることが大切である。また、各教科等で得た学びを駆使しながら解決し、探究の対象に対する価値を感じたり、自分の探究に対して有能感を感じたりすることが必要である。さらに、探究的な活動を通して得たことをこれからの生活場面や教科等に生かしていこうとする意欲をもたせることが必要である。「のぞみタイム」における学習が、一過性のものとどまらず、これまでの自分の生き方を振り返るものであったり、これからの自分の生き方について考え、よりよい自分を目指す原動力となったりすることがのぞまれる。そのためには、学習対象や学習対象に対する探究の方法が自分にとって価値あるものでなければならない。

このように「のぞみタイム」での学習が、一連の探究的な活動を繰り返し発展させていくことで、出会った課題に対してよりよい方法で解決しようとする子どもの姿が期待できる。そうすることで表1で示した「のぞみタイム」において培いたい力を身につけさせるとともに、自分の生き方がより高まった姿につながっていくことが期待できる。



【図2 探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子どもの様相】

「探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子ども」とは
自分の生き方に必要感のある課題を各教科等で培った資質・能力を活用しながら解決し、自分の生き方がよりよくなるように考えていく子どものことである。

2 自ら課題を見出し続けるカリキュラムの創造の基本的な考え方

探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子ども育てるためには、子どもが必要感のある課題を自らが見出し続けることができるようなカリキュラムづくりが必要である。探究のどの過程においても、探究し続ける意欲を持つことが、目指す子ども像へとつながると考えるからである。そのためには、表2のような視点でカリキュラムを構成していく必要がある。

【表2 カリキュラム創造の視点】

自らの課題を見出し続けるカリキュラム

| カリキュラム創造の視点 | | | | | |
|-------------|-----------------|--------------------|----------------|----------------|------------------|
| 枠組 | 言語活動の充実 | 体験的な活動の充実 | 「探究」の技能の明確化 | 伝統や文化に関する教育の充実 | 協同的な活動の充実 |
| 継続的な意欲付け | 論理的な思考の育成、思考の整理 | 概念の補強・修正 人物との交流 | 思考力・判断力・表現力の育成 | 地域に対する愛着の育成 | 自己の生き方をよりよく考えさせる |

(1) 「のぞみタイム」における枠組みについて

自ら課題を見出し続けることができるようなカリキュラムづくりをするためには、子どもが継続的に意欲を持ち続けることが必要である。4年間を通して、市電という共通の素材を窓口で単元を構成する。また、年間二単元構成とし、二学期制を生かし、長期休業中にも自分なりに探究を進められるようにしていく。また、「発見・検証・創造・参加」という一連の学習過程を設け、探究が繰り返し発展できるようにする。(平成21年度研究)

【表3 年間指導計画(3年生)】

| 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----------------------------|---|---|---|---|---|----------------------|----|----|---|---|---|
| 前期 | | | | | | 後期 | | | | | |
| 乗ってみよう市電、見つけよういいところ 35時間 | | | | | | 発見!ぼくらの市電の秘密 35時間 | | | | | |

(2) 言語活動の充実

自らの課題を見出し続けることができるようにするためには、自分の探究を明確にするための言語活動が必要である。子ども自身が計画や実践、考察についてを言語化することで、思考が整理され、論理的に課題をとらえることができるようにする。

(3) 体験的な活動の充実

具体的な五感を通した直接体験は身につけた概念を強化したり、修正したりすることにつながる。また、体験的な活動の中でも、特に人物の生き方に触れることが大切であると考え。そうすることで、自分のこれまでの考えを振り返り、今後の自分の行動について意欲付けにつながることをできるようにする。

(4) 協同的な活動の充実

自分の生き方をよりよく考えさせるために、他者との協同的な活動を充実させることで、自分の活動を常に振り返ることができるようにする。

(5) 「探究」に生かせる知識・技能の明確化

昨年度研究において、各学年において身につけさせたい資質・能力を明らかにすることができた。これを基に各教科等の「習得・活用」の考えとの関連を図りながら、より具体的なものにしていきたいと考える。そうすることで、各教科等で得た知識・技能をさらに高め、自らの課題の解決の方法について考えることができるようにする。

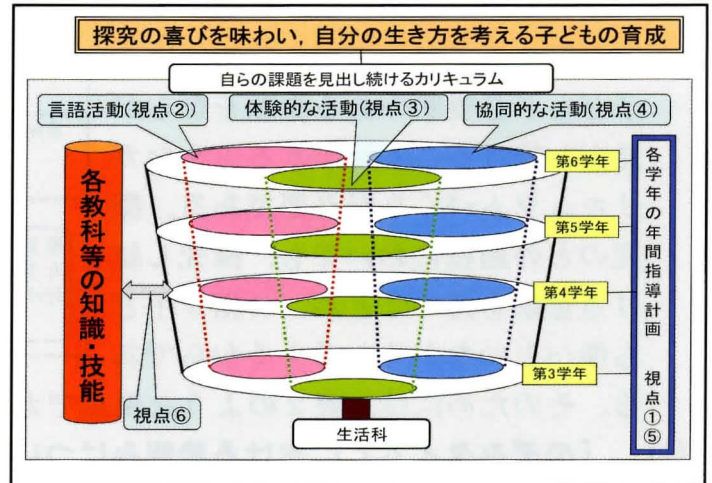
(6) 伝統や文化に関する教育の充実

自らの課題を見出し続けるためには、自分にとって身近な課題を設定する必要がある。そして、伝統や文化の面から自分の生き方を考えさせることで地域の中で生きる自分の在り方を考えさせることができるようにする。(学習内容として考慮する)

3 「のぞみタイム」カリキュラムの全体構想

(1) 全体構想についての基本的な立場

本校の「のぞみタイム」におけるカリキュラム創造にあたっては、図3のようにまず、先行実施をうけて昨年度（平成21年度）に設定した学習内容を基に、自らの課題を見出し続けることができるような学習活動（体験的な活動、言語活動、協同的な活動）を明らかにする。そして、各教科等で得られる知識・技能を基に、「探究」において必要な技能を明らかにし、子どもに発揮させながら、身につけたい資質・能力を育てていけるようにする。



【図3 「のぞみタイム」のカリキュラム全体構想】

(2) 「のぞみタイム」における枠組（学習内容設定・年間指導計画・学習過程）について

ア 学習内容設定・年間指導計画について

学習内容については、平成21年度研究において考慮してきた。その際、以下のような観点で学習内容を設定した。

- 体験的な活動ができる。
- 子どもが自力で解決したり協同的に解決できる。
- 身近なところから追究できる。
- 切実感のある課題が設定できる。
- 調べたことが日常生活に反映される。

そこで、本校では、表4のように鹿児島市交通局の路面電車を共通の窓口として、環境や福祉、伝統・文化等の課題を探究する学習内容を設定した。さらに、各学年の発達の段階に合わせ、学習内容を構造化した。さらに、年間2単元を基本に単元を構成とし、前期で調べたことをもとに後期では実践化していけるようにした。このようにして、子どもたちが、4年間を通して、路面電車という素材を基に、様々な視点で自分なりの課題を探究していけるようにしたのである。また、伝統や文化に関する教育の充実の観点からも、学習内容については先行実施のものを基に、改善を図っていくこととする。特に、3年生、6年生においては、伝統や文化に関する学習内容を考慮できるものと考えられる。

【表4 「のぞみタイム」の学習内容】

| 学年 | | 主な学習内容 |
|------|----|----------------|
| 第3学年 | 前期 | 路面電車調べ |
| | 後期 | 路面電車のよさを伝えよう |
| 第4学年 | 前期 | 沿線に広がる自然 |
| | 後期 | 身のまわりの環境問題への取組 |
| 第5学年 | 前期 | 電車から見える福祉 |
| | 後期 | 自分にできる福祉 |
| 第6学年 | 前期 | 沿線にある歴史・伝統 |
| | 後期 | これからの自分探し |

イ 「のぞみタイム」における学習過程

子どもが自らの課題を見出し続けるためには、「課題を設定」「情報を収集」「整理・分析」「まとめ・表現」が繰り返し行われる必要がある。この様相は単元の中で発展し続けるものが複数現れたり、一単位時間の中で現れたりすることができる。

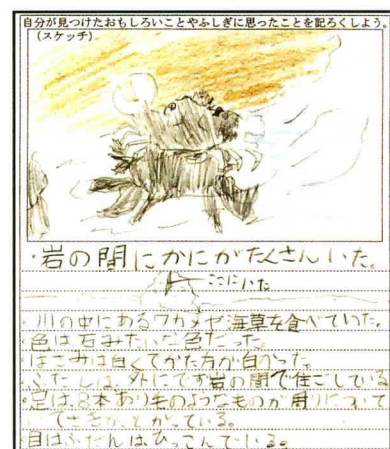
【表5 「のぞみタイム」の学習過程】

| | |
|----|---|
| 発見 | 共通体験等を通して、自分なりの課題を見付ける。〔感じる力〕 |
| 検証 | 調べるための方法について見通しを持ったり、必要なことを調べたりする。〔調べる力〕 |
| 創造 | 学んだことを比較・関係付けて考えたり、調べたことをまとめ・伝えたりする。〔考える力・伝える力〕 |
| 参加 | 学んだことをもとに学習の仕方や日常場面に生かし、行動化する。〔生かす力〕 |

ように単元の学習過程を構成する必要がある。そこで、表5のように、単元全体の基本的な学習過程を設けることとする。ただし、それぞれの学習過程の中にも「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の姿が見出されるような学習活動の工夫が必要である。また、それぞれの過程で、身につけさせたい資質・能力を培えるようにする。

(3) 言語活動の充実について

「のぞみタイム」における言語活動では、「読む、話す、書く」等の活動を各学習過程に効果的に取り入れる必要がある。そこで、表6のようにそれぞれの言語活動において、ねらいを明確にして取り組むこととする。例えば、図4のように、「発見」の過程において気付いたことや疑問に思ったこと等を記録する言語活動を取り入れ、課題設定のための資料として活用する。また、「検証」の過程において、探究の計画を明らかにし、探究課題についてよりよいものにするために、探究の計画について互いに発表し、吟味し合う活動を設けたりするなどが考えられる。これらの活動を通して、自分の課題について常に振り返り、よりよい課題を見出し続けることにつながる事が期待できる。



【図4「発見」の過程の記録】

【表6 言語活動例】

| 過程 | ねらい | 具体的な言語活動例 |
|----|---------------------------------------|--|
| 発見 | 探究の課題につながる事象を発見する。 | 課題につながる発見をノート等に記述する。(書く活動) |
| 検証 | ・探究の見通しを明らかにする。 ・探究に必要な資料を収集し分析する。 | ・探究の計画を記述し、発表する。(書く活動・話す活動) ・調べたり、考えたりしたことを記述したりまとめたりする。(読む活動・書く活動) |
| 創造 | 探究結果をまとめる | 研究記録を執筆し、発表する。(書く活動・話す活動) |
| 参加 | 今後の自分の在方を考える。 | 自分の行動化計画を発表する。(話す活動) |

(4) 体験的な活動について

「のぞみタイム」の体験的な活動は、主に「発見」の過程における『共通体験活動』と「検証」の過程における『実証の体験活動』が中心である。共通体験活動は、単元の導入である「発見」の過程に位置づけることで、子どもは五感を通して対象に触れることができる。そうすることで、課題意識を多様に広げる可能性を持つ。子どもは、これまでの経験や既習事項から自分なりの問いを持ち、自分の生き方との関連で課題を見出すことにつながる事が期待できるのである。また、『実証の体験活動』においては、自分なりの計画を基に探究を続けていく際に、子どもが、現場でなければ解決できない場合が生じてくる。その際に、自分の探究に必要な体験的な活動を設定することによって、実感をともなうデータが得られることができる。

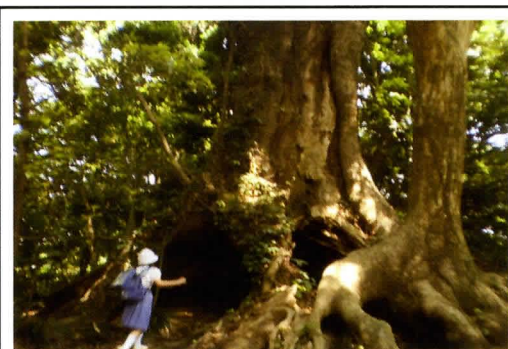


写真1【共通体験での活動の様子】

また、体験的な活動で重視したいのが具体的な人物に触れるということである。子どもは、具体的な人物の生き方に触れることで、自分のこれまでの生き方と比較し、よりよい自分の生き方を見出そうとするのではないかと考えるからである。特に、「検証」の過程においては、『同じ問題を解決している』という感覚を味わうことで、子どもの探究の意欲も高まるとともに、よりよく解決し、自分の今後の生き方についても考えて行く姿が期待できると考える。

(5) 協同的な活動について

自らの課題を見出し続けるためには、探究を続けていく中で、自分以外の他者とふれあう必要がある。他者の見方や考え方と比較することでよりよい探究を見出すことにつながる事が期待できるからである。そこで、グループによる活動や友達との意見交換等、表7のような協同的な活動を通して深まりや広がりのある探究に発展させることができる。

【表7 協同的な活動の例】

| 過程 | 協同的な活動の例 |
|----|------------------------|
| 発見 | 研究内容や研究方法等を互いに吟味し合う活動 |
| 検証 | 探究活動の共同作業や中間発表での意見交換 |
| 創造 | 研究記録の共同執筆、のぞみ発表会での意見交換 |
| 参加 | 今後の実践計画についての意見交換 |

(6) 「探究」に生かせる知識・技能の明確化

「のぞみタイム」は「探究」の時間であるが、より効果的に行い、自らの課題を見出し続けるためには、各教科等との関連を図る必要がある。そうすることで、「のぞみタイム」で学んだことを学習場面に生かそうとしたり、日常生活に生かそうとしたりする姿が期待できるからである。各教科等で培った知識・技能を「のぞみタイム」どのように発揮させるかを考えることで、「のぞみタイム」の位置づけも明らかになる。各教科等の「のぞみタイム」に生かせる主な知識・技能は表8に示したとおりであると考えられる。

【表8 のぞみタイムに生かせる各教科等の主な知識・技能の例】

| | 国語 | 社会 | 算数 | 理科 | 音楽 | 図工 | 家庭 | 体育 | 外国語 |
|------|-------------------------|---------------------------------------|---|--------------------------------------|--------------------------------------|---------------------|-------------------------------------|---------------|--------------------------------------|
| 第3学年 | 相手や目的 段落相互の関係 | 4方位 地図記号 絵地図 壁新聞 | 棒グラフ 長さ・かさ・ 重さの測定 時間の計算 | 虫眼鏡 方位磁針 温度計 | リコーダー ハ長調 旋律楽器 打楽器 即興の表現 | モダンテク ニック 見立て | | 毎日の生 活と健康 | 外国の行事 外国の学校 外国の家庭 世界の文化 |
| 第4学年 | 工夫をしな がら読む書 く | 8方位 縮尺 等高線 47都道府県 | 折れ線グラフ 四角形の面積 資料整理 小数の加減 | 星座早見 検流計 アルコー ランプ ガスバーナー | 楽曲の構造 独奏・重奏 ・独唱・重 唱 記号 | ギフトカード 制作 | | 育ちゆく体 | 世界の国旗 世界の文化 |
| 第5学年 | 目的や意図 文章全体の 構成の効果 | 産業 運輸 地球儀 世界地図 個人新聞 年表 | 小数の加減法 分数の加減法 百分率 円・帯グラフ 体積 | ヨウ素液 解剖顕微鏡 顕微鏡 上皿天秤 電子天秤 | イ短調 電子楽器 和楽器 斉唱・合唱 重奏・合奏 | ポスター 美術館鑑賞 | 栄養素 ゆで料理 住まい方 小物作り ミシン | けがの防止 心の健康 | 外国の衣装 外国の食物 時間割 世界の文化 |
| 第6学年 | 適切に考え を広げ深め る | | 拡大図・縮図 円の面積 分数の乗除 平均 比例・反比例 | 気体検知管 電流計 リトマス紙 地層観察法 | | 世界の建築 物(立体) | 地域 衣服手入れ 献立の立て方 消費生活 環境 | 病気の予防 | 各国の特徴 職業 外国の物語 世界の文化 |

例えば、第4学年の学習には、『川の自然』について探究する子どもに対して、温度計を活用させたり、川の流れる様子を等高線や八方位を活用した地図を作成させたりするなど、表8に示された知識・技能を「のぞみタイム」において効果的に発揮させることができる。このことは、各教科等で習得したことを効果的に活用している場面であると考えられる。また、のぞみタイムにおいて子ども自身が必要だと考える知識・技能を学習することも、各教科等における習得と合わせて効果的な習得につながると考える。



【円グラフを活用する4年生様子】

4 のぞみタイムのカリキュラムの具体化

「のぞみタイム」のカリキュラムの具体化に当たっては、二学期制の特性を生かし、年間2単元構成を基本に単元を構成することとした。その際、後期では前期に学んだことを基にさらに自分なりの新たな探究課題を設定し、発展的に学習に取り組めるような単元構成にする。また、それぞれの学年の学習内容と関連させながら取り組ませることで、効果的な学習が期待できると考える。学習内容の設定については、例えば第3学年では、学び方を身につけていくことができるようにするために、地域の探究が妥当であると考えられる。また、第4学年では調べる対象をさらに広げることができるようにするために、地域の様子をより深く探究することができるような、環境に視点を置いた学習内容が妥当であると考えられる。このように子どもの発達の特性を考慮すると、表9のように学習内容を系統立てた。

【 表9 発達の特性から見た学習内容の系統性 】

| 3年生 | 4年生 | 5年生 | 6年生 |
|-------------------|--------------------------|--------------------------|---|
| 学び方を身に付ける内容 | 調べる対象をさらに広げられる内容 | 考えが連続・発展する内容 | 自分の生き方につながる内容 |
| 生活科の学び方を生かせる地域の探究 | 自分自身や家庭生活、地域社会に目を向けられる環境 | 地域社会、国内外の問題に目を向けられる福祉・健康 | 国内外に目を向けつつさらに自分の地域や生き方に目を向けられる伝統・文化及びキャリア教育 |

以上のことから、各学年の学習内容の柱については、3年生「身のまわりの地域や人々の様子」、4年生「環境」、5年生「健康・福祉」、6年生「伝統、文化」を基本とするが、子どもの興味・関心によってテーマが横断的、総合的なものになることが考えられる。

単元の運用に当たっては、年間2単元で構成することを基本とする。

また、6年生の最終単元は「のぞみタイム」の学習の集大成として、4年間かけて学習した成果を基に自分の取り組みたいテーマを各自で選択して探究できるようにする。ただし、テーマについては、学校教育目標や4年間の学習を踏まえ、「よりよい鹿児島を目指すために」や「自分の将来に向けて」など自分の夢や希望へつなげられるようなテーマを設定できるようにする。このような考え方を基に作成した各学年の年間指導計画は表10に示したものである。

【 表10 のぞみタイム年間指導計画一覧 】

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|----------------|-------------------------------|----|----|----|-----|----|--------------------------|-----|-----|----|-----|----|
| | 前期 | | | | 夏休み | 前期 | 後期 | | | | 冬休み | 後期 |
| 第3学年 (70時間) | 「乗ってみよう市電、見つけよういいところ」 35時間 | | | | | | 「発見！ぼくらの市電の秘密」 35時間 | | | | | |
| 第4学年 (70時間) | 「優しい電車、緑のために」 35時間 | | | | | | 「守ろう鹿児島、守ろう環境」 35時間 | | | | | |
| 第5学年 (75時間) | 「優しい電車、みんなを乗せて」 38時間 | | | | | | 「広げよう福祉、みんなのために」 37時間 | | | | | |
| 第6学年 (75時間) | 「発見！市電から見る鹿児島の偉人」 38時間 | | | | | | 「めざせ！のぞみ博士」 37時間 | | | | | |

また、年間指導計画を作成するに当たっては、図5のような様式で作成することとする。

単元のねらいについては、学年の発達の段階を考慮したものを記述するようにする。指導上の留意点については、単元の特性を考慮して、言語活動、体験的な活動、協同的な活動等で特に重点的に取り組みたいことを具体的に述べるようにする。

活動の展開では、「発見」「検証」「創造」「参加」の各学習過程において、価値ある学習活動をいつ、どの程度の時間で行うか、その際の具体的な働きかけ、探究に必要な知識・技能を具体的に述べるようにする。

さらに、表11に示したように、カリキュラム創造の視点に基づいて、具体的な活動を設定する。例えば、第4学年における前期に実施する「優しい電車緑のために」では、「発見」の過程においては、「課題の記述」や「課題の吟味」という具体的な言語活動を想定するということである。体験的な活動では「共通体験」や「実証体験」を設定していくなどして、カリキュラム創造の視点を具体化していく必要がある。

第○学年 のぞみタイム 指導計画

- 1 単元名： ○○○○○○
- 2 単元のねらい

【感じ方】
 【調べ方】
 【考え方】
 【伝え方】
 【生かし方】

身につけたい資質・能力の観点で述べる
- 3 指導上の留意点

単元の特性に応じて、重点的に取り組みたい活動に対する留意点を述べる。
- 4 活動の展開

| 過程 | 主な学習活動 | 学期時間 | 教師の具体的な働きかけ |
|----|-------------------|------|------------------------------|
| 発見 | ・ 共通体験 | 前期 | それぞれの活動における具体的な働きかけや留意点を述べる。 |
| 検証 | ・ 計画発表 ・ 中間発表会 | | |
| 創造 | ・ 研究記録作成 | | |
| 参加 | ・ 行動計画作成 | | |

【図5 指導計画の様式】

【表11 カリキュラム創造の視点に基づいた第4学年における活動例】

| 単元名 | | 「優しい電車、緑のために」 | | | | 「守ろう鹿児島、守ろう環境」 | | | |
|---------|-----------|---|-----------------|--------|--------|---|-----------------|--------|--------|
| 期間 | | 前期 | | | | 後期 | | | |
| 過程 | | 発見 | 検証 | 創造 | 参加 | 発見 | 検証 | 創造 | 参加 |
| 単元構成の視点 | 言語活動 | 課題記述 課題の吟味 | 検証結果の記録 中間発表 | 研究記録作成 | 実践計画発表 | 前期学習を基に課題を発見 | 検証結果の記録 中間発表 | 研究記録作成 | 実践計画発表 |
| | 体験的な活動 | 共通体験 | 実証体験 | | | | 実証体験 | | |
| | 協同的な活動 | 共同研究 他グループとの意見交換 | | | | 共同研究 他グループとの意見交換 | | | |
| | 関連する知識・技能 | 地図記号、絵地図、壁新聞、8方位、縮尺、等高線、虫眼鏡、方位磁針、温度計、折れ線グラフ | | | | 地図記号、絵地図、壁新聞、8方位、縮尺、等高線、虫眼鏡、方位磁針、温度計、折れ線グラフ | | | |

Ⅲ 研究の実際

1 実践の立場

第4学年「優しい電車、緑のために」では、鹿児島市内の路面電車の沿線に広がる自然を探究する学習内容である。本実践では、「探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子ども」の姿が見出せるようにすることをねらいとする。そのための視点として、カリキュラム創造の視点も鑑み、以下の視点で実践を行うこととした。

- 自分の生き方と比較しながら、体験的な活動に取り組むことができたか。
- 友達との活動を通して、新たな自分の生き方を見出すことができたか。
- 各教科等で培った知識・技能を発揮して探究に取り組むことができたか。

また、その際実践を評価する際は、言語活動として表出された子どもの姿をどのような知識や技能を生かしているかを分析して見取り、指導にも生かしていくこととする。

2 「のぞみタイム」第4学年 年間指導計画

| 1 単元名 「優しい電車、緑のために」 全30時間 | |
|--|---|
| 2 単元のねらい | |
| 【感じ方】 路面電車を活用した、共通体験をもとに身のまわりの自然環境に興味・関心を抱き、こだわりたいテーマを決めることができる。 【調べ方】 探究計画に沿って実地調査や図書資料、インターネット、関係機関等での取材をするとともに、よりよい方法で工夫しながら情報を収集することができる。 【考え方】 グループ内の友だちや他のテーマを追究する友だちとの情報交換や話し合いの中で、お互いの人、もの、ことについて気づいたことや調べたことを比べたり、関係付けたりして、自分の取組を振り返るとともに、お互いの取組のよさを考えることができる。 【伝え方】 追究したことについて、絵や図、表等を効果的に活用して相手にわかりやすく伝えることができる。 【生かし方】 追究してきたことをもとに、「もっとくわしく追究したい」「今度は〇〇について調べてみたい」等という新たな思い・願いをもつことができる。また、追究してきたこだわりや追究する過程で発揮した取組み方や生き方を教科等の学習や生活場面で生かすことができる。 | |
| 3 活動の展開 | |
| 過程 | 主な活動・体験 |
| 発見 | I 優しい電車、緑のために 1 路面電車での自然探しの計画を立てる。 ○甲突川 ○城山 ○錦江湾 ○周遊 2 自然探しの活動をしよう。 ○甲突川コース ・川の生き物 ・川の流れ ・石の様子 ・植物の様子 等 ○城山コース ・昆虫や鳥 ・植物 ・林道 等 ○錦江湾コース ・海の生き物 ・潮の流れ ・海辺の植物 等 ○周遊コース ・沿線の植物 ・軌道敷内の芝生 ・公園の動植物 等 |
| | 3 探究計画を互いに発表し合い、計画を練り直す。 |
| 検証 | 4 自分なりの方法で調べる。 見学・取材・調査 もう一度調べに行こう。 博物館でも調べられるな。 図書室やインターネットで調べよう。 |
| | 5 調べたことをまとめ、中間発表をする。 |
| 創造発信 | 6 中間発表会を基に見つけた新たな課題について調べる。 |
| | 7 調べたことを発表する。 |
| | 8 自分のや友達の発表をもとに今後の自分の行動化計画を立てる。 |
| 時間 | 教師の働きかけ |
| 前期 6 | ○ 路面電車を通して、身のまわりの自然に焦点化することができるようにするために、路面電車の沿線やその周辺にある自然を紹介し探究の意欲を高めるようにする。 ○ 共通体験の自然探しを効果的に行うことができるようにするために、あらかじめ活動の場所を設定しておき、自分が行きたいコースについて明らかにしておくようにする。 ○ 切実感のある探究課題を見付け、今後の探究に生かすことができるようにするために、自然探しの発見や感動を記録し、課題をもたせるようにする。 ○ 探究の対象について、自分の気付きや友達の気付きを効果的に出し合い、協同的に探究を深められるようにするために探究の対象別に小グループでの活動ができるようにする。 ○ 自分の探究の計画をよりよいものにするために、活動計画を互いに紹介し合う場を設け、計画を修正したり、補ったりすることができるようにする。 ○ 調べたことについて、様々な事象を比較・関係付けながら継続して記録できるようにするために、活用した資料等をファイリングし、いつでも活動を振り返ることができるようにする。 |
| 16 | ○ 子どもたちが主体的に取り組むことができるようにするために、見学や取材、調査などを効果的に取り入れ、自分たちで実際に現場に行き活動できるようにする。 ○ 探究を深めることができるようにするために、中間発表会を設けることで、探究の内容や方法について新たな課題を見いだしていけるようにする。 ○ 新たな課題について、再度探究の計画を練り、実証の体験活動を中心に取り組むことができるようにする。 ○ 相手に分かりやすい伝え方ができるようにするために、調べて分かったことを研究記録にまとめる。その際、どのような資料で表現すべきかをグループで吟味して表すことができるようにする。 |
| 6 | ○ 今後の自分の生き方について考えていくことができるようにするために、探究を記録を基に発表会をする。また、自分ができるところを実践できるような意欲付けをする。 |
| 2 | |

3 実践結果と考察

(1) 「発見」の過程における単元の課題発見を目指した共通体験（体験的な活動）

この過程では、自らの課題を見出し続けるための入口に当たり、知的好奇心を高めるために素材と有用な出会いをさせる必要がある。そのため、単元のねらいに即した活動場所を選択し、五感を使った体験的な活動が必要である。この単元の「発見」における過程で、子どもたちは共通体験として、路面電車を活用して地域の自然探しをした。この活動は、子どもたちが身近な自然の中で特に自分の興味がある川、海、山などから、一カ所を選択し、自然にふれあう活動である。子どもたちは、これまでの生活経験との比較から動植物や自然の構成、自然と自分とのつながりなどの新しい発見をし、探究の意欲を高めるための出会いをすることになった。さらに、今後の探究の目的を明らかにするために、新しい発見の驚きや疑問を記録させる言語活動を通して、自分が見つけた事実や感想を明確にすることができた。



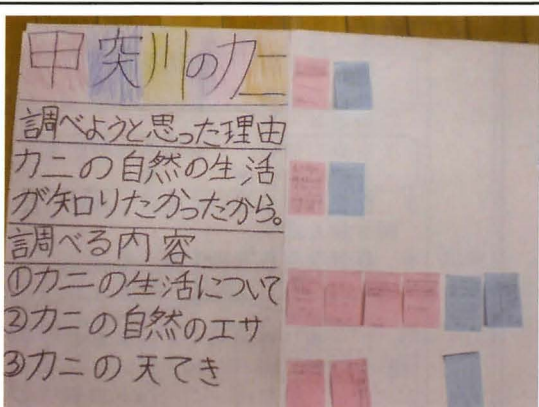
【共通体験の様子】

(2) 「検証」の過程における探究計画発表（言語活動・協同的な活動）

この過程では、探究の計画を立てる部分に当たる。自らの課題をよりよく解決するための内容や方法が妥当であるかをグループ同士で吟味し合う言語活動と共同的な活動を行う。具体的には、まず、初めに自分たちの活動計画書を作成する。次に、研究の動機や調べる内容、調べる方法、まとめ方を記述したワークシートを提示し、全員に説明する。そして、疑問に思ったり、伝わりにくい記述に対しては赤色の付箋紙で指摘し、伝わりやすい記述に対しては青色の付箋紙を貼らせるようにした。このような質問や意見交換をする活動を通して、新たな探究計画書ができるのである。この活動は、友達からの意見を基に新たな視点が加わり、探究の内容や方法を認めてもらったり、修正されたりすることで、計画がさらに充実したものになるのである。また、友達のよさや自分のこれまでの考えについても考える機会が増え、「自分の生き方」を考えることにもつながったのである。



【友達の探究計画書に意見を書く様子】



【探究計画書に貼られた付箋紙】

(3) 「検証」の過程における中間発表会（言語活動・協同的な活動）

この過程では、探究してきたことに対する、中間の報告を行うものである。言語活動と協同的な活動にあたる。前述の計画発表とあわせて、この中間発表会を行うことで、

自分たちの探究の内容や方法が妥当であったかを振り返るとともに、他のグループの探究にも意見をすることで、それぞれの探究が共同研究の様相を帯びたものになることが期待できるのである。

さらに、中間発表会を通して、まだ不十分であったり、新たな課題を見出す場面にもなることから、自らの課題を見出し続けるためには有用な学習であると言える。



【中間発表会の様子】

(4) 「検証」の過程における実証の体験活動（体験的な活動・協同的な活動）

この過程では、自分が疑問に思ったことを実際に様々な手段で調べたり、考えたりする。文献やコンピューターによる探究とともに、探究の結果がより具体性を持つようにするために、課題を解決するための実証の体験活動を重視することにした。子どもたちは、実際に体験的な活動を通すことによって、より明確な事実を明らかにすることができたのである。また、中間発表を基に見つけた新たな課題や探究を続けていくうちに見つけた別な課題を自分なりに解決していこうとする子どもの姿が見られた。



【実証の体験活動の様子】

(5) 「創造」の過程における研究記録の作成（言語活動）

この過程では、自分たちの探究を形として残す活動をする。これまでの学習では、ただ調べっぱなしであったり、発表資料などが発表後に活用されなかった様子が見られた。研究記録を作成する言語活動を通して、自分の探究を自らの課題を振り返るとともに、今後の自分の日常生活への取組みを考える姿が期待できる。また、作成した資料を基に今後の各教科等の学習に生かして行くことも期待できる。



【 研究記録作成の様子 】

(6) 「創造」の過程における発表会（言語活動）

この過程では、探究してきたことを発表する活動である。研究記録として探究してきたことをまとめる活動はしてきたが、それを友だちに伝えることになる。伝えるために効果的な資料（絵図・グラフ・表・地図・写真・年表など）は何か、どのような方法で伝えたらよいのかをグループ内で話し合い、発表に生かす姿が見られた。



【 発表会の様子 】

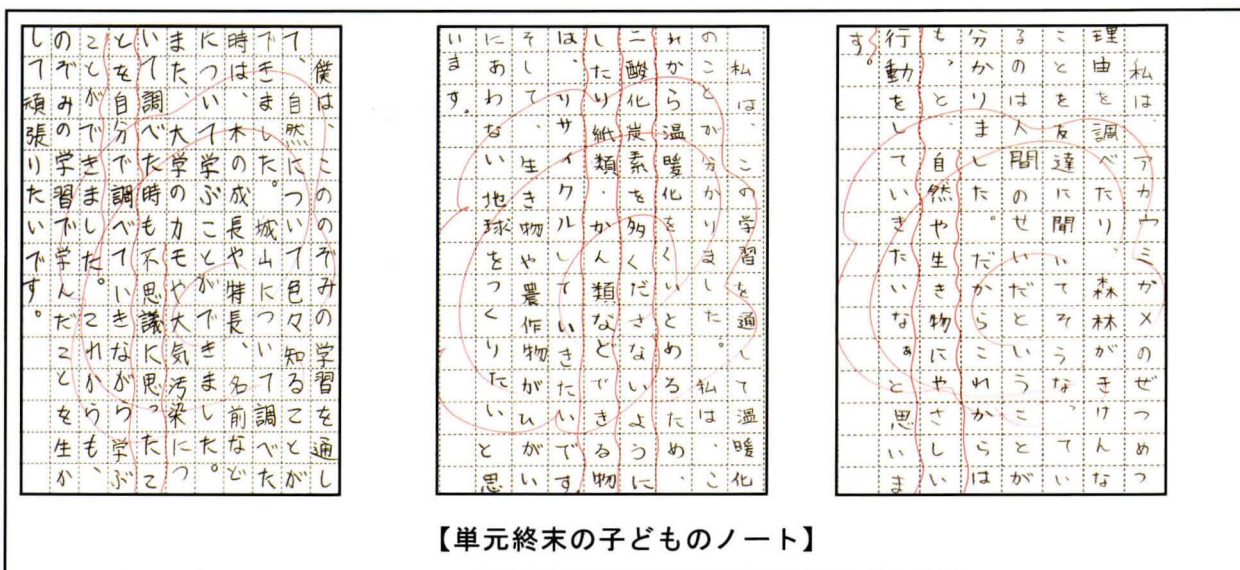
(7) 「参加」の過程における行動計画作成（言語活動）

この過程では、これまでの学習を踏まえて、今後の自分にどのように生かしていくかを具体的に宣言し、見通しを持つ言語活動が中心の学習である。単元の学習の集大成として、「自分の生き方」を考え、今後の生き方について「自らの課題を見出し続ける」ための学習にもなることが期待できる。

また、これらの活動を通して、子どもたちは、「自然を守るために、少しでも自分にできることをしていきたい」など、自分の探究と自分の生き方について考え、これからの自分の生き方について考えて行こうとする姿が見られた。



【行動計画の発表の様子】



【単元終末の子どものノート】

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 先行実施を基に、目指す子ども像の姿を「探究の喜びを味わい、自分の生き方を考える子ども」することで、「のぞみタイム」における学習活動を具体的に設定することができた。
- 他教科等の知識・技能を洗い出すことで、「のぞみタイム」において活用できる知識・技能を明確化し、他教科等との関連を見出すことができた。

2 研究の課題

- 「自分の生き方」をよりよく考える子どもを育てるための、学習内容や評価を含めた指導方法をさらに改善していく必要がある。

《主な参考文献》

- 文部科学省 小学校指導要領解説 総合的学習の時間編（東洋館出版 平成 20 年）
- 嶋野 道弘 編著 「小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編」（明治図書平成 20 年）
- 鹿児島大学附属小学校編著 「総合的な学習の時間を創る」（東洋館出版 平成 12 年）
- 田中博之 編 「総合的学習のカリキュラムを作る」（明治図書 平成 12 年）